

図師村甲ヶ原開発に賛成した上図師・弁四郎とその家族

第4回 弁四郎の娘たちについて

◆三女“こま”について

“こま”は、前回提示した安政4年2月付の人別送り状によると、母“こと”とともに甚右衛門家へ預けられることになります。預けられた安政4年時、“こま”は10歳で、甚右衛門家ではお使いを言いつけられることが多かったようで、お使い先は村内や近隣だけではなく、少し遠方の中沢村（現相模原市城山町内）へも出向いています。【巻末表】

その後、「晴雨日記」（図師町・佐藤家文書2016【巻末史料1】）の安政5（1858）年2月24・25日の記事には、“こま”に関する記載があります。これによると、“こま”は江戸中之町（現港区赤坂あたり）の金子久三郎屋敷へ奉公することになったようです。“こま”は2月24日に甚右衛門とともに図師村を出発し、昼ごろ赤坂に到着、15時ごろに奉公先となる金子久三郎の屋敷に出向いています。その後、一行は飯倉町合羽屋に宿泊し、翌日6時ごろに宿を出発、愛宕神社に参詣した後、“こま”は8時ごろに奉公先の金子家へ預けられています。“こま”は実際に奉公にあがる前の2月16日にも甚右衛門と下図師の喜平次に連れられて江戸へ出向いています。こうした奉公前の事前準備とも思われる行動には、甚右衛門の気遣いがうかがえます。

◆次女“しも”について

“こと・こま”母子が江戸に奉公に出た時期を同じくして、弁四郎のもう一人の娘“しも（霜）”も人生の節目を迎えます。“しも”に関係する史料として、安政5年2月付の人別送り状が残っています（図師町・佐藤家文書2643【巻末史料2】）。これによると、当時20歳の“しも”は、鶴間村の弥市（弁四郎家親類）の仲立ちで、瀬谷村の庄三郎（守屋家）のもとに嫁入りすることになったことがわかります。

『日記』二にも“しも”に関する記事がみられます。前年12月から“こと・こま”母子が甚右衛門家に厄介になっているなか、安政4年2月12日から15日にかけて、“しも”は甚右衛門家に宿泊したり、出入りをしていますが、その目的について、具体的な記載はありません。“しも”の嫁入りに関係すると思われる記事は、安政5年2月からみられるようになります。“こと・こま”母子が江戸奉公にあがる直前、2月16日から18日にかけて、“こと”と弁四郎家相続人である“とせ”が鶴間村町谷を訪れています。その目的は“しも”の嫁入りの仲立ち人である親類の細野弥市を訪ねるためであったと思われます。その後、弥市は2月23日に甚右衛門家を訪ね、翌日日野に向かい、25日に“しも”を同道して日野から図師村に戻っています。そして“しも”は27日に瀬谷村へ嫁いでいきました。しかし、「晴雨日記」

（図師町・佐藤家文書2016）の記事から、瀬谷村に嫁いだ後も、“しも”は図師村および日野へ出向いていることがわかります。『日記』には弁四郎の死後も一家の記事が散見されますが、“しも”に関係する記事は、他の家族と比べて少ないと思われます。その少ない記事には、たびたび「日野」というキーワードがみられるため、“しも”にとって関係が深い家や人物が日野におり、そこを頼って暮らしていた可能性も考えられます。

◆家と村社会

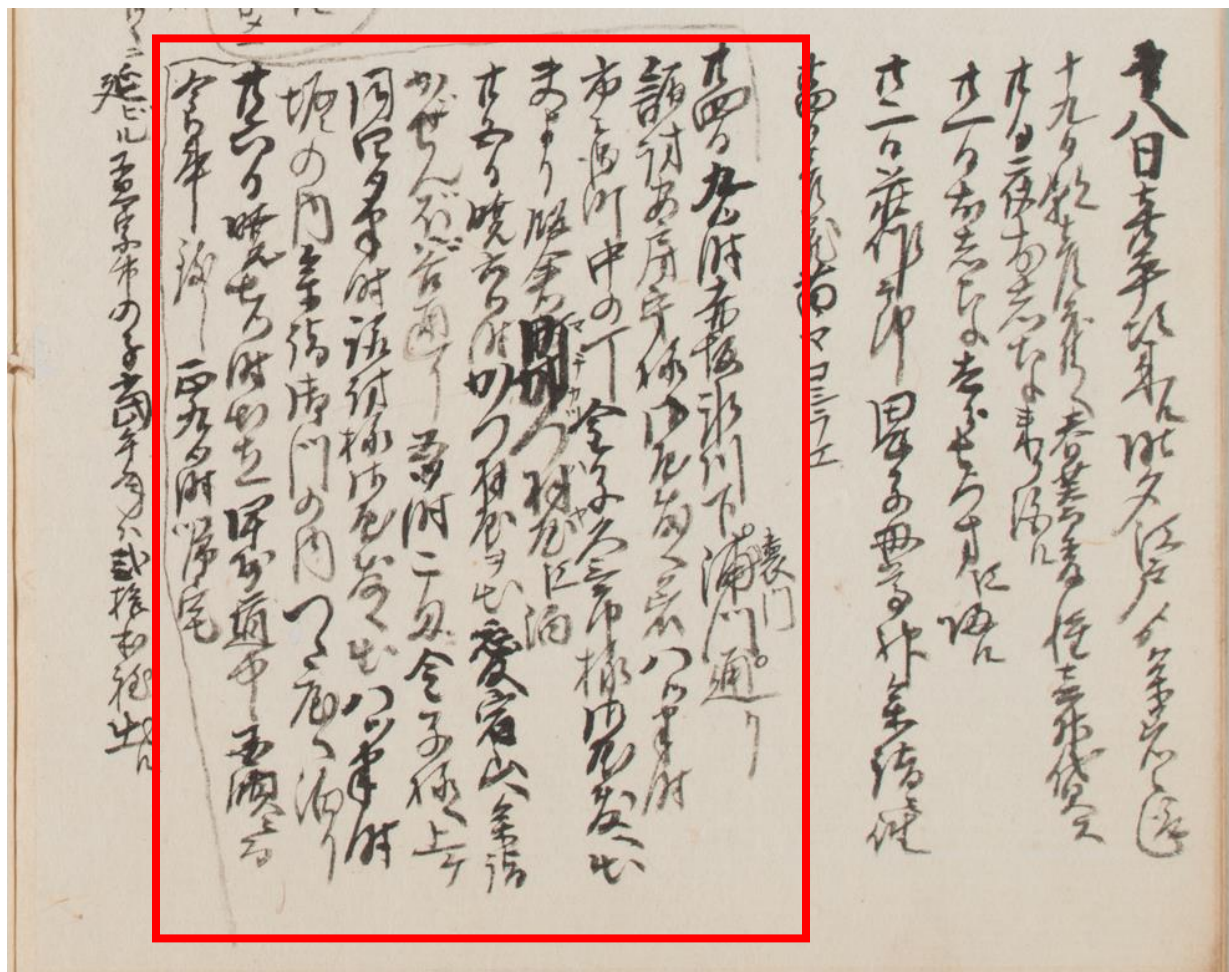
以上、残された史料から弁四郎とその一家の人生をたどってみました。弁四郎は、弘化から嘉永にかけて村内で立ち上がった新開畑開発に村役人の一人として関わり、開発を主導する親戚や経済的支援を受けて来た人（甚右衛門）の活動に助力し、開発地を割り当てられましたが、実際に開発を進める直前に亡くなってしまいました。大黒柱を失った一家でしたが、村落社会や親類からの助力を受けながら、生きていく人びとの姿をここに垣間見ることができます。

（当館学芸員 小林風）

【巻末表】 弁四郎の家族に関する「晴雨日記」記事一覧

年	月日	記事
安政3.	8.3	五兵衛来り候節、 弁四郎 後家之 嘶有之
	12.2	二日夜、芳五郎・ お事 来ル
	12.19	おこと 坂下へ見舞二往
	12.22	お事 坂下へ往
安政4.	正.9・10・13	此三日に 筥女 来、半天ヲ縫ふ、 沓ツ仕上ケ
	正.13	お事 義初之事故、五兵衛の事ヲ 嘶し、怨の模様見ゆる
	正.14	芳五郎立寄ル
	正.26	おこと 坂下へ往、串柿沓輪・半 紙沓帖、年玉ニ五兵衛へ持○源 兵衛・源之助へも半し沓帖ツ、 持往
	正.29	おこと 義、半次郎方へ仕立もの 二往
	2.2	おこと 坂下へ往、 おとせ 日野よ り来ル
	2.3	おこと 何か思ひ候哉不機嫌
	2.12	十二日夜、 お霜 来り泊、十三日 夜、同人泊
	2.14	十四日夕方、芳五郎来ル
	2.15	お霜 来ル、夕方帰ル
	2.16	お霜 来ル
	2.18	お殊 中沢へ往、 お駒 同道来ル
	2.20	同日、 お駒 坂下へ往ク
	2.21	お駒 坂下へ使二往ク
	2.26	廿六日夜、 お駒 坂下へ泊ル
	3.7	七日夕方、芳五郎来ル
	3.14	お駒 縫糸買二往
	3.21	お駒 中沢村へ往
	4.2	お殊 、五兵衛江往
	4.14	お殊 ・秀・利根、蔵とり二往
	4.16	殊 、坂下・小山田へ往、同日蔵 とり二往
	4.29	殊 ・秀・利根・荘作主・すわ、 合五人茶摘二往、昼前
	5.3	同日昼前、 こと ・秀・利根・荘 主・音次郎、五人茶摘二往
	5.6	常盤へとね・ 殊 ・鍛冶屋妻茶摘 二往
	5.8	殊 茶摘二往
	7.3	おこと 坂下へ往ク
	7.18	こと 坂下へ往ク
	7.27	こま 寺へ使
	7.28	こま 来ル
	8.7	殊 、坂下江小林之便宜聞ニゆク
	8.15	お殊 亦出来
	8.16	右同人（ お殊 ）坂下へ引渡ス手 紙ヲ付テ与五兵衛弟貞輔へ送り 遣ス

年	月日	記事
安政4.	8.16	与五兵衛義、 こと 一条ニ付来ル、 不取敢返ス
	8.18	お駒 、坂下江往ク、同日泊ル
	8.19	江と屋専蔵来ル、 おこと 一条取 纏咄し也
	8.22	こと 、坂下より帰縁
	9.18	八王子へ古屋敷之用ニ而 こと 往
	9.27	こま 使ニ来ル由
	10.1	屋より古屋敷へ秀・ こと 往
	10.2	こま 、江ど屋より帰ル、但し七 月21日ニゆく也
	10.4	こと 、糸取り
	10.5	
	10.6	古屋敷へ こと 稲こきニゆく
	10.16	こと 、糸とり
	10.17	
	10.19	こと 、中村へ見舞二往ク
	10.20	坂下へ こと 往
	10.23	廿三日より こま 、弥右衛門方江 被頼往
	10.24	こと 、与五兵衛方江針仕事ニ被 頼往、夕方、 こと 提灯ニ而帰ル、 鶏肉沓皿、小林より菓子沓折持 参
	11.20	夜、五兵衛一周忌取越年忌 こ と ・ こま 往、廿一日夕方帰ル
安政5.	11.28	夜、 こま 来り、泊
	2.5	こま 、坂下紺屋へ使二往
	2.6	こま 、六日ニ和吉へ往
	2.9	こま 、和吉へ往
	2.15	おとせ 来り、泊、同夜小林来り、 泊ル
	2.16	こま 、江戸江往、喜平次同道也
	2.16	こと ・ とせ 、町谷へ往
	2.18	こと ・ とせ 町谷より帰ル、 とせ 坂下泊
	2.23	夜、細野弥市殿来り、泊
	2.24	同人（細野弥市）、日野へ往、 又兵衛ヲ頼、供ニ遣ス
	2.25	弥市、日野より帰ル、 お霜 同道 来ル
	2.27	霜 、瀬谷江嫁ス
	2.29	弥市ら来り、晦日ニ帰ル
	3.10	お霜 、瀬谷より来ル
	3.11	お霜 、日野へ往、夕方祐弘斗り 帰ル
	3.13	朝、友蔵妻一条ニ付、丹次殿迄 こと 往
	3.15	こと 離縁、日野江往
	3.17	霜 ・ こと 、日野より帰ル
	3.18	朝早支度ニ而瀬谷村へ右兩人 （ 霜 ・ こと ）往ク
	4.6	茶買ニ秀・ こと 兩人往ク、下矢 部ニ而五百文之割、三百三十拾弍 文買



〔前略〕

裏門

廿四日九ツ時赤坂氷川下浦門通り

諏訪安房守様御屋敷へ着、八ツ半時

市兵衛町・中の丁金子久三郎様御屋敷へ出、

夫より飯倉町かつ羽屋江泊

廿五日暁六ツ時かつ羽屋ヲ出、愛宕山へ参詣、

かぜんぼ谷通り、五ツ時こま金子様へ上ケ、

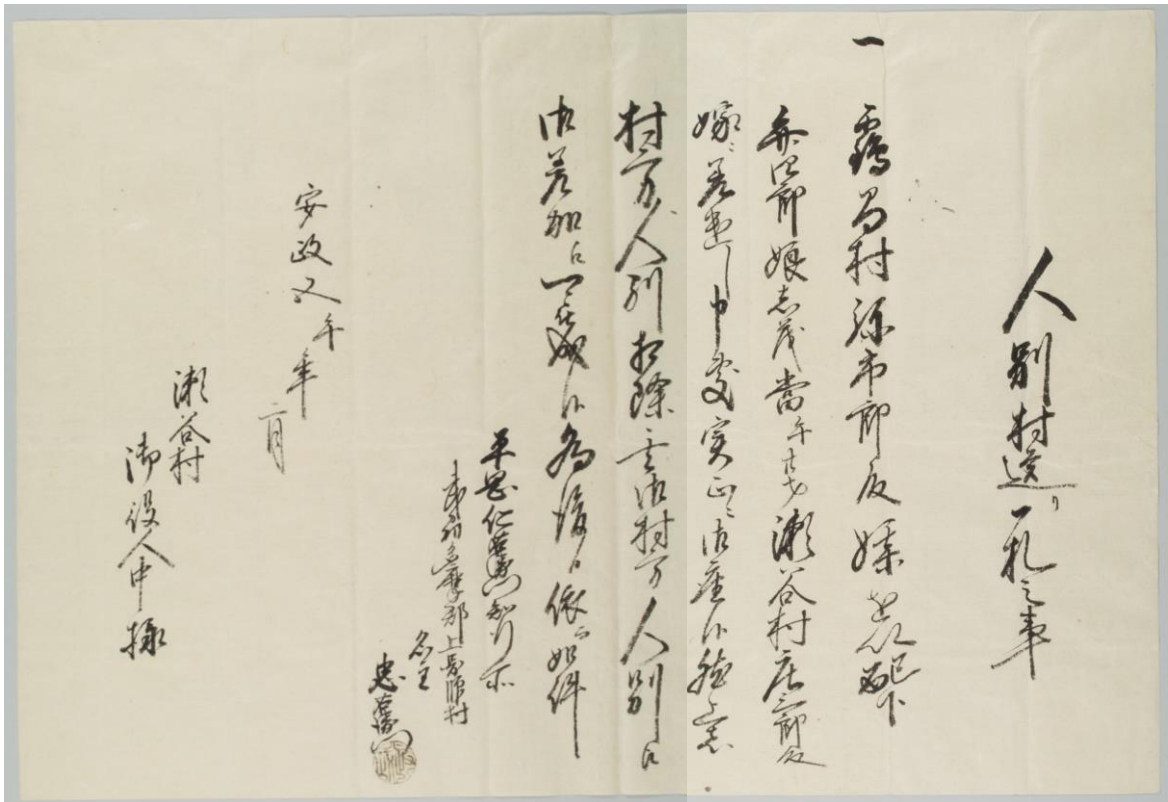
同四ツ半時、諏訪様御屋敷へ出、八ツ半時

堀の内参詣、御門の内つた屋へ泊リ

廿六日暁七ツ時出立、甲州道中国領二而

食事致し、正九ツ時帰宅

〔後略〕



人別村送り一札之事

一、鶴間村弥市郎殿媒を以、配下

弁四郎娘しも、当午廿才、瀬谷村庄三郎殿

嫁二差遣し申処実正二御座候、然上は

村方人別相除、其御村方人別江

御差加江可被成候、為後日送依而如件

平岡仁右衛門知行所

武州多摩郡上岡師村

名主

忠右衛門印

安政五年二月

瀬谷村

御役人中様